

オンライン脱抑制の影響メカニズムを検討する

Wen Ruohan

第1部

オンライン環境では、人々は現実世界ではしないような発言や行動をすることがある。この現象を説明するための有力な理論として、Suler (2004) が提唱した「オンライン脱抑制理論」が挙げられる。この理論によれば、人々は対面の場においては社会的規範やルールに従って行動や発言を抑制しているが、オンライン環境においては匿名性や不可視性といった特徴の影響を受けてその抑制が弱まり、よりオープンに振る舞うようになる。本研究の問題意識は、オンライン脱抑制がどのようなメカニズムによってオンライン行動に影響を与えるかを解明することである。

第1章では、オンライン脱抑制理論を紹介し、本研究におけるオンライン脱抑制の定義を明確にするとともに、これまでのリサーチギャップと本研究の目標を説明した。本研究では、温・三浦 (2022) による「オンライン環境において行動を抑制する機能が弱まったり消えたりする心的状態」という定義を採用している。オンライン脱抑制のメカニズムについては、先行研究において、良性的・有毒的脱抑制モデルやオンライン脱抑制・行動モデルなど、さまざまな理論モデルや実証的アプローチが試みられてきた。しかし、良性的・有毒的脱抑制モデルでは、オンライン脱抑制の概念が不明確であり、「良性」と「有毒」の判断基準がそれぞれの結果に依存しているため、循環論法の問題が存在する。オンライン脱抑制・行動モデルでは、行動の生起過程においてネット利用者の個人的な特性が考慮されていない問題がある。そこで、温・三浦 (2022) は、より精確にオンライン行動の生起過程を検討するため、「動機づけ・オンライン脱抑制モデル (MODモデル)」を提案した。MODモデルでは、動機づけとは人が特定の行動を取る欲求を指し、オンライン行動の規定要因として機能する。また、その行動が実際に表出するかどうかは、オンライン脱抑制によって調整される。具体的には、動機づけが強い場合にはオンライン脱抑制が強いほど行動が表出しやすく、動機づけがない場合にはオンライン脱抑制とオンライン行動の間には関連性がないと考えられる。本研究は、このMODモデルを理論的枠組みとし、その妥当性を支持するための実証的検討を行うことを目的とした。

第2章では、本研究の実験における行動と動機づけについて説明した。本研究で扱う行動は、SNS上の投稿を閲覧した際に「いいね」や「よくないね」のリアクションボタンを押して意見を表明することである。動機づけについては、MODモデルで指摘されている外的誘因と内的動因に基づき、複数の視点から意見表明の動機づけを概念化した。後述するように、第2部～第4部は外的誘因・内的動因それぞれの視点からMODモデルの妥当性を実証的に検討するものであり、第2部と第3部では外的誘因に、第4部では内的動因に焦点を当てている。

第3章では、本研究の方法論を説明した。一貫性を持つ実験的な文脈のもとでオンライン脱抑制の効果を検証するため、スレッド閲覧実験をデザインした。匿名オンライン掲示板「5ch」における乳牛の殺処分政策に関する議論を参考にし、複数の実験用スレッドを作成した。スレッドの最初の投稿では乳牛の殺処分政策を紹介し、続くリプライ投稿では、この政策に関する議論や、同時期に炎上していた「コオロギ食事件」に関するミームを使った政府や政治家への批判が含まれた。具体的なリプライ投稿の構成は、研究仮説に基づいて調整された。また、より生態学

的妥当性の高いデータを取得するために、Qualtricsのホットスポット機能を活用し、実験参加者がリアルタイムでやり取りを行えるスレッドを作成した。これにより、実際のSNSでのやり取りに近い形で調査票を作成し、参加者の意見表明を観察した。

第2部

まず、外的誘因の視点から参加者の意見表明の動機づけを概念化した。具体的には、「いいね」や「よくないね」の数情報がもたらす影響に焦点を当て、数情報が表示される場面では意見表明の意欲がより強まると予測した。第4章では、予備研究を実施し、数情報が表示されない架空のスレッドを作成して参加者に読ませ、意見表明を観察した。その後、予備研究で各投稿に対する「いいね」と「よくないね」の数を集計し、それらを表示するスレッドを作成した。第5章の研究1では、数情報が表示されるスレッドを実験参加者に提示し、意見表明を観察した。数情報が表示されるスレッドと表示されないスレッドにおける意見表明を比較し、その影響要因を検討した結果、数情報の表示の主効果は有意であったが、オンライン脱抑制と数情報の表示の交互作用は有意ではなかった。つまり、実験参加者は意見表明の動機づけが強い場合でも、オンライン脱抑制の影響が強まらないことが示された。

第6章の研究2では、さらに数情報の影響を探索するため、「いいね」と「よくないね」の数情報を逆転させたスレッドを使用して実験を実施した。その結果、参加者の価値観に反する数情報が提示されると、意見表明の動機づけが低下し、オンライン脱抑制の調整効果が見られなかった。研究1と研究2の結果については、状況的要因としての数情報の表示の効果が、心理的要因であるオンライン脱抑制を圧倒したと考察した。つまり、状況的要因が社会的望ましさに反しない行動の動機づけを形成する際、または動機づけを低下させる際には、オンライン脱抑制と行動の間に有意な関係は見られないということである。

第3部

研究3aでは、投稿内容の影響に注目し、過激な発言を含む投稿は逸脱的な動機づけを引き起こすため、それに対する「いいね」がオンライン脱抑制の影響を受けやすいと想定した。過激投稿と一般投稿を同数選出して新しいスレッドを構成した。二種類の投稿に対する「いいね」の合計数を検討した結果、投稿の種類とオンライン脱抑制の交互作用は有意ではなかった。研究3bでは、参加者の各投稿に対する主観的な印象を測定し、各投稿に対して抱く刺激感と不快感から「いいね」行動を説明できるか検証した結果、刺激感や不快感とオンライン脱抑制の交互作用が有意であることが示された。具体的には、ネット利用者が刺激感や不快感といった感情を喚起された場合にのみ、オンライン脱抑制の効果が見られており、MODモデルを支持する結果であった。

第4部

研究4では、個別の過激投稿に焦点を当て、その投稿に対する態度を用いて内発的な動機づけを予測した。その結果、過激投稿に対してネガティブな態度を持つ参加者は、オンライン脱抑制のレベルに関わらず「いいね」をする可能性がほとんどなかった。過激投稿に対してポジティブな態度を持つ場合にはある程度「いいね」が見られたが、オンライン脱抑制が「いいね」に与える影響は有意ではなかった。この原因として、研究4でのターゲットが個別の投稿に限定されて

いたため、サンプリングバイアスや偶然の要因の影響を受けやすかったと考えられる。

第5部

4つの実験を通じて、オンライン脱抑制が意見表明の直接的な規定要因ではなく、調整要因として機能していることが確認され、MODモデルを支持する結果が得られた。第10章では、これらの結果を基に、オンライン脱抑制理論への貢献を論じた。学術的貢献として、オンライン脱抑制の影響メカニズムに関して、より精確な説明を可能にするMODモデルに対して実証的な証拠を提供している。また、ホットスポット機能を活用したスレッド閲覧実験を採用することで、参加者がより自然にやり取りを行える環境を提供し、オンライン行動の研究に対して安価で制御可能な方法論を提示した。実務的な貢献として、オンライン環境でのネガティブな行動の根源が人々の動機づけ要因にあることを明らかにした。この知見を活用することで、問題のあるネット利用に対して、より効果的な対応策を講じることが可能となる。最後に、本研究の限界として、オンライン行動の動機づけに関する検討が不十分である点やスコープの限定性についても議論した。

(社会心理学)